



特
へ13
3150
5

瀟瀟堂
石

昔話 箱妻表紙卷之五上冊

江戸 山東京傳編

⑤ 孤鴈の禍福

當時あむ右衛門又平考一回ふの金の出所いふと。いぶるこひひけ所野ふ
一人の男。汗もあせり小息もほれぬほど。飛がごとく小をせ来り。案内も
そのと内ふのこ。たしめ小爰おちたるがといひつ。あこことえまじ。
あむ右衛門が手小持たる財布とるはけ。そ我失ふたる金。たを
は方へくとどろいひつ。財布小手紙の所と。あむ右衛門。つりたる女
ハ長谷部雲六なるびどろといふ。男仰天し。しりく。る。佐々良三
八郎。かしろ。若殿。柱之助もあへ。け。ま。ち。く。警馬。財布も
と。て。逃。い。ごと。あむ右衛門。猿。臂。と。伸。る。と。び。は。ら。ま。て。ひ。き。

古今圖書集成

りし。藤の下小押一志をそひひく入。汝六年以前去るも今月今
夜百蟹の巻物と盗逃去たるもわがえのぞ。我その夜若殿
御放埒の根となんと。藤波と殺し。ふむぬありて。一旦館と
たちのさし。同夜の更なり。其れもあん疑かり。汝のひ合せ
の巻物を盗し。なると共盗賊の汚名をせり。うきぬ。そのちり
巻物と賣人といふ者ある。それとて汚名をまがむ。やとるひ
けれども。價百兩といふ大金なり。わが力か。たゞ。まう。海女娘楓は。り
閉て深く悲し。うきぬ。ををせ。物芝居。子賣て百兩の金をその
の巻物を買ひし。諸人。小面。成さじ。丹波の国の蛇娘と。毒小耻
との。い。を。憂。刃の。う。と。あ。う。ぬ。う。れ。ま。ま。汝。が。あ。せ。し。業。小。あ。ら。じ。や。唯
今。う。き。ど。や。会。せ。し。へ。天。の。ふ。へ。我。宿。恨。を。ま。が。む。と。い。ふ。時。の。う。き。ぬ。あ。

ちり。な。ま。生。皮。を。剥。臊。子。小。さ。さ。む。じ。も。飽。を。う。り。ま。と。の。ひ。り。り。葉。貝。子。の
上。小。白。異。の。尖。を。ま。ら。う。つ。け。し。と。ま。う。け。し。は。雲。六。の。一。言。な。返。答
と。い。ふ。詞。あり。只。う。き。あ。う。こ。う。ち。り。び。け。り。時。小。又。平。が。妻。小。枝。と。い
や。う。り。雲。六。が。顔。を。つ。む。く。と。ま。り。り。つ。り。て。居。つ。る。が。大。小。お。ろ。ろ。先
年。杉。坂。あ。て。妻。が。懐。中。の。金。二十。兩。を。奪。取。逃。去。た。る。盗。人。の。ま。ら。う。ち
此。者。あ。て。た。し。う。ふ。る。お。ろ。ろ。え。の。う。き。と。い。ふ。を。又。平。と。て。扱。い。あ。う。あ。う。け。る。う。
因。心。人。と。仇。人。と。あ。う。も。同。月。同。日。小。さ。う。と。出。会。せ。し。は。正。是。天。の。ま。ら。う。び。と
あ。ふ。処。あ。し。善。悪。つ。ひ。小。報。あ。る。ま。と。示。し。あ。ふ。所。あ。る。ん。の。う。き。雲。六。の。ま。ら。う。ん
よ。う。き。け。そ。小。枝。金。と。う。き。の。ひ。ひ。け。り。首。縊。て。死。ん。と。せ。し。は。三。八
郎。が。情。を。金。子。と。合。力。され。危。と。一。命。を。た。と。う。た。た。る。の。の。始。終。を
は。が。ま。ら。う。け。ね。ば。雲。六。頭。を。た。と。う。居。る。が。や。が。て。一。刀。は。後。て

腹ふざごとつたて。いと苦しげお息をつきそひひける。あまねろしや
 勿体や。今やしく天の賞罰あはれ。つむる支を去りて積悪の報の
 親面ふめざと来る。と瓜曉しぬ。某が懺悔物語と一回おん同ふざ
 か。そのまゝ某在京のうち。五條坂の曲中お通ひて過分の金銀を
 取。おん館を出奔して。北山をよぎ杉坂ふいごけるお折しも風雨
 つまかりけしむ。去りし木蔭お暗間を待居たゆふ。それわら婦人来
 ぬ。おひ。懐中おのげふんえける。又悪念おこし婦人を地上お
 踢倒して。二十両の金とらびひ仕合しと攻びて。その所と逃去そのち
 みの巻物を金五十両お賣ける。一所不住お迷あり。同おの金と
 残りつひお尽し。つひお零々落しそめる。おとまりぬ。某の金と奪を

死ふとてまめん。三八郎そのの金取つて。死を救ふひつら。今之
 へ善悪のながひ誠お壊。雲宵とるたの海がごとし。豈賞罰の報あるんや。
 初某ちうごう当国おいらして。草津の駅お住家ををり。幸ひ石山寺
 の観音用帳ありて。おいらしけしむ。おの門前お出鼓を歩かせ。舞の
 謡とらなひて物を乞ける。お前の日おひうけむ。幼年の時つらしたゆ。
 八重垣そのお妹おあひ。住家おもぢおひつらして。何れと過去し。お
 どもを語しける。お妹某がぬ浪人したる。おれをそひひける。又悪念
 おこし。つらつらとそひひける。お我前の年在京の刻。偶五條坂お通ひ過
 ぬ。金の金銀とつら。そのおひめを法くのつん為。若殿よりあつらる。
 絵巻物と質入し。法る。つひおそののあつられて。おなむ。お浪
 の身とかりぬ。格別の料おもあつらぬ。今やもみの巻物をらけり。と

てさう上げば飯泰のめりか必定するれども。本金小利金をくらべて。これ
こそ百両なるこの金あるべからず。かろくそのひびがく。今先非を悔ると
いどもめひやう。このひびを。そり泣して又せけはば妹とれと実やし。
まゝば妻が金を賣て金以てその巻物と受けり。て飯泰
を願ふ人といふあぞ某心小計なりしと攻び。うぬくつらうと情なきも。
妹を当所の伏業の里におてゆき。百両小利金を賣て。今日もその
子の代をうけり。と天つものおつらうし。つる路の傍に。一羽の雁首
をあらそ。落居らう。飛けひひやう。えりとも。拔足して拾取て
えり。笠前の疵。齧のあともなし。相へり。ぢふ。雁金の。行倒ると
推量し。何みすれ福のいつと。時晩の寢。淫の香。し。ひび。飢たる
瘦腹と肥さん。の。と。公の。うち。攻び。る。栄。耀。心。い。で。提。て。ゆ。く。も

つぐへしと金財布の紐のあつてを。雁の足におひつけ。肩の尖みなり。と
げて懐手にて飯了し。が。何と。志けん。かの。雁。途中。あて。獲。生。ぐ。と。つ。け。な。る
財布も。ふ。虚。空。を。存。して。飛。去。け。る。あ。ひ。び。で。翼。を。た。ぶ。る。を。悲。し。も。て。
あ。と。ま。さ。ひ。て。は。処。ま。で。追。来。り。し。が。落。げ。た。雁。も。あ。ら。ば。此。お。ち。り。て
君と始めなり。かの。方。ふ。出。会。い。某。が。旧。悪。の。あ。つ。つ。ら。う。ハ。正。是。兄。の。為。ふ
金を賣。不。どの。実。ある。妹。の。子。の。代。を。む。さ。り。し。某。が。非。道。を。ふ。く。も。
天罰を。多。く。あ。ふ。疑。な。し。今。あ。の。う。ら。ま。り。と。さ。ひ。あ。ら。う。と。て。財布
を。と。ら。う。あ。げ。此。百。兩。の。金。ハ。先。年。奪。し。二十。兩。小。利。と。ら。へ。て。又。平。この。お
ち。を。あ。ひ。び。合。力。う。け。し。三。八。郎。の。へ。は。終。返。し。む。ひ。て。清。息。女。楓。の
お。と。の。が。ち。ひ。返。し。玉。の。と。う。し。さ。も。あ。ら。ば。我。子。の。罪。の。一。分。を。減。し。つ。ら。う
来。世。と。た。ま。を。り。便。も。相。あ。ら。べ。し。い。そ。れ。を。同。ね。ば。よ。そ。と。小。坊。り。ひ

しぐは度石山寺の門前にて諸人小入ると蛇娘ハ楓どの不疑りし
閉をけては清西人といひて掌と合せて舞え涙を滝のごとくは
けし又平の財布をさしてあむ右衛門の前におれ雲六慚邪讖
罪しと実心小ひらつてしうへ不便も存どねばめれが望のごとく
此金めて息女をわがやひ少しといふかむ右衛門頭を右左ふり
うごじのりやく八重垣とやんさばうと實の傍者をうた川竹のやが
とふあづめ長く辛苦とうけ去りんの志のびがたれりやうと娘
楓ハあづめ覚悟のうへにて親の為ふをぐかめとうるりやせん
とどかり。は金を取して八重垣とさういひし。ほふまどしといひて
うけがはざし。雲六苦げ息をつき。あその金めては息女の身代
わがやひあづめ。あつて妹が實公のめひもあざし。殊更その金

おん刃の膝のあつてふ落ちたるよし。畢竟天をうと忠臣孝子ハ賞
むひて与へあふ疑や。若海川やもあちのやが妹が志ハ水の泡と
やうと少し。ひとふおん因とけむりさうし。若さもあづめ其死しとも
ころろと眼をさしてやうととて涙をわけてけむひけ。桂之助始
終と因悪もはさく善もつた彼がねむ。末期の望やあづめ
とけはさうとさし。おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
けり。雲六はうとさし。げお打笑。今ハ此世のものをさし。死出の旅路
のそらぐ。相公の御前をけりて罪ハおん免し。あわれし。腹十支
字小のさやう。咽吭とけり斬て。うらや。お伏てを死したる。時ふ
あむ右衛門の鳥とさうとあけていさ。此鳥鷹小似たるといふども
もしく。えね。漢名蒼鷺といふ鳥あり。とも高飛鷹小似て蒼白之

夕へ楓をいじりて。又つらねてまきも白べーとのひて出たぬ時ふ三井の
晩鐘はげけつて。勢田のあつたふ夕日のかげぞやうめけり

⑤ 名 畫 の 奇 特

初も其時あむ右衛門至君桂之助ふねひて娘楓ふりてをさせ。又平夫
婦阿竜等ふも引合せ。今日のくはれ物語とやうききせければ楓
お同て因果輪轉の理善悪つひふ報あつたを曉して嘆息しけり。
かくて又平夫婦食事と調じてあむ右衛門父子ふあへ一間のうらふ
みちびいてやとぬせけり。あむ右衛門父子のたをそひさしけり出合なれば
とぬぐの物語ふらむど時とうり。やうく睡ふつさけりふやあつて楓が
声ぞしてあむやくとせりたさげけり。あむ右衛門教馬れあつて醒て
又れば楓が腹ふ巻はるたふ小蛇懐ふて飛出ると見えけり。忽丈一丈

むらこの大蛇と變ド。楓が牙をいじりてあむもあつてあむひね。あむのやしやあむも
いふとぶにこのあつてまきとひけるふ枕よふおれらる。笈のうらちふと。あむこの
蟹ふひ出て大蛇ふりつと。蟹をみて肉をたきみ。血の泉のごとく
やうれて。暫時ふ大蛇を殺しおんぬ蟹はたぢふらる。笈のうらちふ
をひつると見えけり。とあむら。夢やうりけり。あむ右衛門夢さめて。あ
うちふ汗とるがし。楓をいじりてしけり。楓もいじりてあむとあむと起
りけるあむ衣服とらうらげて腹をえらふ。うらむで片時もあむれ
ざる妖蛇いづらへおれりやん失てあつたふあ。あむ右衛門さて正
夢あつたあつとあむひら。笈のうらちふとあむの巻物とらうとあむと
とあむれば。画中の蟹の蟹ふ尽く鮮血はれてあむとけり。は時己ふ
四更のころやうり。又平も楓があつたあつた声を聞つけて起つて来り



楓孝道
 のりきゆうり夢中
 名画乃奇特と得て
 妖蛇乃難義と
 まぬる



藤波
 成仏
 得脱と

名古屋巻之五

あむ在陽門が夢中の夏とさ。灯火をわけての巻物を熟覧し。掌を打ていひけり。奇なるゆゑ妙なり。巨勢の金岡ハ清和陽成光孝。宇多醍醐の五朝子はして官大納言小至る。曾て御府子藏あふ金岡が画ける馬。毎夜萩の戸のやるとみ出て萩の花をくひし。古今著聞集ハ又えたる。まゝ仁和寺の御室小金岡が画馬あり。近田のふとみ出て。稲の苗をくひし。河内の国金田村牛頭天王の社頭の金岡が筆の絵馬。わけ出し。つたぐひの説。つと。同傳ふるとつども。目前の奇特をえる不思議。柳此百蟹の図ハ金岡殊小精神をこめ。螃蟹の絵ハ妙以得。唐代の名画韓滉といふ者。玄宗皇帝の勅ありて画たる。百蟹の図ハありて。つたぐひ。同はるが。つら。今が。は。め。や。り。神彩飛動誠み生るが。如し奇特あり。

もふぶりの某とて。画道の奥儀とさ。めたり。といひ。は。り。欢びて巻物と。かし。つ。と。再。又。い。ひ。け。り。と。ふ。は。は。り。て。さ。ひ。ひ。せ。る。物語あり。昔山城国相良郡久世郡。綺田村ハ一個の美女あり。曾て仏道と信ぞ。一時里人あり。この蟹と捉へ。煮て。さ。り。ん。と。つ。の。女。是をえて。あ。い。し。と。美。食。ハ。つ。て。蟹。と。尽。く。池。ハ。も。り。ろ。又。その。父。一。時。野。子。出。て。蛇。の。墓。と。吞。と。又。て。あ。り。れ。り。若。墓。と。ん。る。ち。や。び。我。娘。と。汝。ハ。あ。い。ん。と。い。ふ。蛇。ら。れ。と。さ。入。た。る。さ。あ。て。墓。と。吐。て。去。し。む。その。夜。衣。冠。の。若。人。来。り。て。約。の。ご。と。く。女。と。ま。つ。と。い。ひ。て。一。室。ハ。つ。て。忍。大。蛇。と。変。じ。て。女。の。才。と。ま。つ。と。小。時。小。前。の。日。た。と。け。ら。れ。る。あ。ら。み。蟹。と。ふ。集。り。大。蛇。の。遍。身。と。螯。殺。し。て。女。と。さ。い。ひ。大。蟹。ハ。去。小。蟹。中。ハ。そ。こ。死。す。と。い。て。その。所。小。蟹。ハ。び。蛇。の。め。ど。う。り。め。寺。と。建。て。

晋門山蟹満寺と号す或まゝ紙幡寺ともいふし元享叙書巻八
子又えたり。息女の事よくいふ小似くも。あふ小似れ陰徳陽報の
理と示しつねの名画の奇特ありて孝女とて共小是仏の慈
悲衆生濟度の方便之あれ壁におしたる我拙筆の絵を又あへ地
水火風の四ツの緒の。きねてえらや兒琵琶法師も忠孝全之竹杖
少て煩惱の犬と赤畜生道とまぬめれて。天堂小生うらめち。子
息文弥ぶの姿絵とも又えらうし。緑青の髪とち胡粉の肌无常
の風子塗笠も骨の残る手弱女が肩小ぬげ一枝の紫雲たぶく
藤の花と味藤波が成仏の次女なり。積悪の角と折鬼やと心
をひらぐと墨の衣小短ちさぬは是乃長谷部雲六が邪念と滅せ
し突りくどや。喜怒哀楽小ゆるごらと。むくくのめらとち。喜と

やうと悪とちり。正とちり邪とちり。恩とちり仇とちりも三世因果の報
とるへ互の恨もつごら。矢猛心とちり。唯彼等が菩提とちり。ふ
小志し某さねやどの夢小友浪女とちり。敵三八郎どの親子のいじ
さ忠孝と感どねば今ハ恨も尽とて。安養浄土小生とちり。い
て。ちり。光明をえちりて去とえらねば成仏得脱とちり。い。こ
い折しも桂之助小枝於竜と共小。ぬかをさぬて。一回と立出
我く三人もある。夢をえらとちり。このひて一回小よりさびけ。時小根
父の前小手とつと。妾こと妾とちり。妾浪どの文弥等の菩提と
とひくゆへ。剃髪とちりて尼とちり。むのどしとちり。あむ石門のい。こ
い。剃髪无用なり。我今より剃髪して。佐渡嶋坊と名告
我異名と汝小あがり。若殿を立小出。まあせ。後ハ専修の念

仙者におありし。ゆの蟹満寺ちとる破損したるはしまげばそれと修理
して亡人ぐの冥福の種とせし。ちんち六字南无右房門といふ名と
ほげば道心せしも自然なり。汝又ちり文弥が師となのたり。
沢角檢校ふまごひ。近ごろ丑小おこるる。浄瑠璃節と文子ひ因
果の道理と唱哥ふはくし。河原小於そらねとゆら。普諸人を
勸進して我志願の助力せよといひおりの。鬘弗とゆら。河内わかつちの国小
位牌いはい小手こて向けとび。みあくその誠心まことこころを感じけ。六字南无右房門
といふ女大夫おんなたいふ。浄瑠璃芝居じぎの始祖あそこなりといひつゝ。ちんちハは楓が事なり
とぞ。おむ右房門又桂之助ふむひて頭かぶたをさげ。これより河内の国小
おん越おんごあつて若君小御わかし対面たいめんあれし。奥方おくかたのあんちくへはやまて
たがぬ少い。ご夜のあけぬ間ふとくとめる。桂之助のそら

く身支度して又平へいふむひ。我時運と得て丑小出りん。かやんが
報ととげだそといひてつと告つぎ編笠へんがさあつてゆけり。立出たちだせ。おむ
右房門修行者の姿その倭し小楓かへを具して相あと。又平夫婦於
竜もこもりゅう小恙しょうじやうなく。ちんちませといひつゝ。門かどおろし。たがぬ涙なみだをととぎ
て別れわか幾いく小町ちやうをりゆれけ。昨日きのうちんちあつち縣あゑ神子しんこ野のぶせうの乞こ
もどもをゆひ来りて道みちをふた。そのころ官領くわんりやう濱名はななのころ
まびくたがぬあふ。佐さ木桂之助とやん。ゆづへちちゆぞ。けれ
昨日きのう又平またへい家いえおせり。家内かゐの様子ようすゆづし。ちんちあつち今いま更さらふ
ちんちあつちちんちあつちあふ果あつちしてあつちあつち者ものどもり。ゆづへちちゆぞ。あつちあつち右房門みぎのふ追おちし
あつちあつちゆぞ。ちんちあつち手てとつちあつちゆぞ。あつちあつち右房門みぎのふ追おちし
てとつちあつち。錫杖しやくじやうをとつちあつちのべり。ちんちあつち物ものゆげ。様やう二郎

捧とるを走り出の奴原を散ぐ追ちし。うねうね志賀の山越
しと見立のたれあれし人のまがらう同道と見供はつらんそ。ほひふ
四人おつれそつれぬ。とて雲六が死ハ。又平その夜ちれ山おれ
ゆとそ焔とる。あとなんぞふとつひけるぞと

(十七) 雪溪の非熊

爰ハ又梅津の嘉門ハ母と共ハ虫を避て和州河州のまゝ金剛山水越
峠の谷陰ハつづき庵をのりて。当山ハ柔草おやく。殊ハ金山はて
金剛砂と出と由也。これらとそりて日ぐの費ハつづき薪をこころし
水とく。あけらば老母ハ孝行を尽し。いぬぬハ書籍を友とて卧竜
先生の跡を追禪味を甘とて大幢国師の道をかこひ。名利ハ屈せぬ
志がらつにたふらざる。一日老母山寺ハまらざるが比ハも。累冬ハの

時節ハなバ。飯路ハのぞいて雪ふと出。スらく滿地玉とまけけら
ごと。通ひやれら道とらも。深く雪ハかきとたれハ。おのづから道ハ
迷ハ。殊更峠越の吹雪肌ハ老母と寒けれハ。ゆとあまて杖ととら。素
一たふら居ら折ハも。獵師ハ追出されら。穴熊ハ雪を踏立て
馳来り。わどく老母ハ飛ハらん。たふら処ハ一人の若者木陰と走り
出。立たがらうとて熊の肩ハを一刀さうつけた。熊ハ怒て狂ハ
けら。つひハ足をわきわきして谷底ハさし。まらる。そおら。の若
者ハ腰をかき。老母ハむうひ。年老ハおん。雪中の歩行ハ
おまのびがし。づく。あもあれ。おん住家ハ。負行ハせん。つあ
老母ハ。げハ。づく。の。今ハ危難ハ。つひ
の。情保ハ。志謝ハ。つひハ。つひハ。つひハ

梅津嘉門
河内國金剛
山小世と遊て
清負と
生涯の
杯



御指南おあがり。の奥儀の昏をも拜見一度おひら。容易おひら
あまを多しあはるは。門路もあつとるひひ。今日もあひら
相まへし誠是師とたのびに時節到来。天のみらびにあはれは
向後おん家の奴僕もあつとて。薪水の業を命せられ兵術の進退
軍伍の勝敗御指南たのびるなりと。低頭謙讓しておひ入たるけさ
あどるね嘉門感致して。いふ若輩の志を以て武道の
心かけ深き殊勝さ。いふ疎意お存づに何おもあはれ且某が
宅おん越あれ人のいふひらあつとるれども某が得たる
業ハ林小入で薪をらと谷おらうて水とくむの。他のまへさる
まど殊更武道つれど草とやん昏と編たるなど。あもる
虚言やと。軍師あつとるは。かこがほしマといひて笑つ。三人お連して

谷おげのいふおつとるね。嘉門家お飯り。老母お衣服ををせ
濡衣をあつとる。お柴をたてあてら。さかふつとる体と。の
若者おそそ平日の孝行とるひやりね。嘉門茶と煮て若者おら
四方山のりのりして。まどく時をら。けりお断り外のら。おま
の声あけぬ。人跡たえ。此か。家お何者の来つと。いづら
案内とら。おのひぬ。さうおひえ。これ一人の武士なり。蓑笠
打着て笠の下お覆面した。お面はさうやうねども。遠国の旅人と
あつた打扮なり。雪深くさうさう。たる柴の戸を。おとち
誰をたのび。し。そのあけ。あつと。の。声。閉。て。老。母。立。出。何。人。ど。と
あひら。おん。の。頃。日。兩。度。ま。ま。あ。つ。と。侍。ら。ま。今。日。も。嘉。門。家。お
を。と。御。用。の。間。お。あ。ひ。や。と。返。し。た。え。お。た。の。の。ま。ど。と。嘉。門。お

うけがふなれば様もわく飯つらう。又今日も来りてとちあひなまきゆ王
 けれども。仕官さうさう心あければ。とちく人ふあひなまきゆと
 のれそとひそ他行といひつらう。とちく人ふあひなまきゆと
 かのどとく寒気ホ苦しむたけ者。は方の心も察せど長居とらうけ
 人いひくともとあひなまきゆ。かの若者ふ除て追飯とふまき
 とひひそ若者とちうづけ。俄小詞とつていひけら。汝またど奴僕らも
 おめるといひつらう。詞ふよとて。しつらう。支あつて。ゆき雪中の侍と汝が辨
 舌とひそおひつせ。いふつらう。嘉門へ他出せ。といひて。是非とも
 つせといひつらう。若者うけあひなまきゆ。某侍を云の手柄とらう。おん
 手ふあひなまき馬麻者と。おひひく。とて。外のかうふ立いで。
 ややく旅人おんあひなまきを待たう。あひなまき。嘉門の飯宅のなと何の時こ

とらう。若日もくれば。難儀のう人の難儀。とらう。とらう。とらう。
 いざくといひつらう。手とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
 由理之助勝基公あひなまき。いふ姿へ何あひなまき。とらう。とらう。とらう。
 行ひ。官領職のおんあひなまき。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
 御容体。いふか。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
 ども。一言の答なく。唯拳を握り。歯を咬み。とらう。とらう。とらう。とらう。
 子なり。桂之助とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
 道殿の御内意。いふ。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
 の。ねも理あり。かつ大雪といひ。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
 ろふ。嘉門を軍師。お召抱。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
 中。い。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。

短慮卒忽の大將。又寛仁大度の大將。をばうもあざり御心慮どうふ
 一ふの心よの至どりさせざる心あり。我子あざり一方の大將はて不足
 嘉門と一生深山の埋木谷の菓守と朽果させん。母ととらて御
 存公のさせん。と存つさ度く心ありぬ不礼のこと。故中せしよ。も
 此堪忍のをばせし。心のうちあひつらり。勿体なく。只感涙とあ
 かし。居ひひねとひして。老の涙をまことある。老母又桂之助ふむひ
 されやと途中中をめん目ふかりし時よ。唯人あざりとさひふ。され
 わど勝基公ふめん物語り。とのめけやてうけたるわね。果して
 君よておしけり。一度もめん目ええのさねば。妾とおんえ知あ
 まはく。妾も又おん親とえあざねども。今ハ何とつふ。いかに君の
 元来妾腹よ。その後実母ハ妾ハ娘嘉門。為ぬ好めて。君ハ産

なりてとてふ身まをさしひひ。先奥方の賢女あておの世も少し。も城のい
 る。奥方の御正腹と御披露あは。平人のオあて。さば君の妾が。為ぬ
 孫あはとも。腹はとも。ちつと。のめねば。妾が。為ぬ。正しく。主君り。と。
 かつと。そのめも。奴僕と。む。打擲せし。大罪あは。も。それ。あは。と。さ。く。縁故
 あり。い。色を。御覧。せ。と。は。出。と。桂之助。ハ。始。て。実母。の。母。の。ま。又
 を。知り。て。お。驚。馬。頓。小。包。と。ひ。と。さ。と。ば。短。冊。ふ。ひ。の。短。冊。あり。と。と。あ。げ。つ。と。ね。
 咲。白。入。柳。津。の。川。乃。花。さ。う。と。う。り。の。鏡。の。かけ。も。く。り。む。と。
 どの歌をまるせ。桂之助眉とまらめて。は手跡ハえおがえあり。この老
 母小膝とまらめ。その為家郷の詠歌は。て夫木集ふ入たる。歌。わ。り。が。
 二のつ。祖。父。君。佐。木。盛。貞。公。御。在。京。の。折。り。妻。が。夫。梅。津。兵。衛
 北野の社人あて。あは。し。時。御。連。歌。の。つ。で。ふ。見。筆。と。と。め。て。た。り。

一短冊あり。その短冊の箱を以て打擲仕りし。とある。ち祖父君の
 ん拳とくさされ君がそれまで御不行跡を戒む。同然之ある
 小君ん怒のけり。ひも又えむ。むのど妻が打擲とな。あがむ。あ方体
 深く先非を悔む。武道はれ。草を得。御勅気。あ。ひの
 種とほ。あ。ん。御心底。あ。の。れ。て。あ。ん。の。と。と。胸。さ。ら。る。る。悲。れ
 と。え。せ。や。と。ほ。じ。と。涙。と。か。く。せ。老。が。心。と。御。推。量。を。さ。れ。し。子。も
 孫の。あ。れ。の。世。の。人。の。心。ぞ。し。平。人。の。兒。も。あ。る。が。祖母。孫。と。名。告。あ。ひ
 娘。が。あ。る。と。い。う。く。片。時。も。傍。と。あ。る。と。ほ。れ。小。君。臣。と。あ。る。と。い。う。が
 ひ。ひ。た。き。こ。の。の。あ。り。な。れ。も。心。み。あ。の。の。と。し。と。ひ。て。悲。致。ふ。袖。を。ひ。じ
 け。る。と。良。あ。る。と。て。涙。を。ぬ。ぐ。ひ。う。小。嘉。門。い。う。か。の。秘。唇。を。惜。ま。ふ。と。君。も
 た。そ。ま。り。れ。と。い。う。か。ぞ。嘉。門。さ。ら。え。ゆ。と。て。の。書。を。取。出。て。桂。之。助。ふ

与へり。老母又勝基小む。御覧のごく桂之助の今。ひの志を
 あ。じ。た。り。あ。ら。る。れ。ん。館。の。御。前。あ。る。と。い。う。と。い。ひ。ふ。願。ま。る
 こ。の。桂。之。助。の。秘。唇。と。勝。基。小。渡。一。誓。首。俯。伏。し。て。も。ふ。ら。れ。と
 願。け。り。勝。基。亦。同。む。ひ。わ。れ。て。あ。ん。館。御。懇。望。の。は。秘。書。を。な。め。ら。ん
 国。知。の。大。功。あ。る。れ。ん。御。前。を。よ。ま。ふ。と。い。う。と。い。ひ。て。あ。て。飯。国。と。い。う
 持。ぐ。こ。の。と。あ。つ。べ。三。人。ひ。じ。く。あ。ら。ふ。と。い。う。と。恨。り。あ。り。切。嘉。門。勝。基。小
 ひ。ひ。先。年。慧。星。あ。り。れ。た。り。刺。星。の。う。ろ。蒼。黄。と。あ。び。た。と。い。う。と。北。雅。辰
 て。婦。女。権。を。奪。大。乱。の。起。る。と。い。う。と。考。え。た。る。と。い。う。と。勝。基。堂。手
 を。あ。て。そ。の。先。見。と。感。ん。だ。義。政。公。の。北。の。其。堂。香。樹。院。殿。へ。若。君。と。濱
 名。入。道。小。相。托。し。て。あ。ら。る。と。い。う。と。今。出。川。殿。へ。勝。基。を。執。權。に。て。武。將
 た。と。い。う。と。と。い。う。と。れ。天。下。ニ。ッ。ホ。ワ。レ。と。い。う。と。已。小。大。乱。の。起。る。と。い。う。と。時。節。あ。る

事とりのがらりけと。嘉門又先年濱名が招きふたせし。岩坂
 猪之八等数人をあつち。なごちふふあをのししたる。夏をめぐらて互ふ
 権兵衛の夏を論。嘉門当山小住常小早の城路をえく。楠氏の
 奥妙を感る夏など。物語ける。嘉門のさねのひひけり。さうなる
 官領職のおんが。あては山中小唯ひとて。往來しあ。若濱名方の者
 ども。因知り多勢と必。こころのこころ。あふやん君子ハ危きふ
 ちう。つらととのり。軍患のわとうけたら。度ゆと詰問ハ勝基莞
 尔と打笑ざる時の備。こふありこのひ。懐を探り。蹄笛をこり出。て
 吹立あつ。忽。鎧腹巻小壁。手。膝。指。をら。び。く。め。ら。て。蓑。笠。を。ら。ち
 着たる荒武者ども。この木蔭。か。この岩のげ。より。あ。の。れ。出。て。数。十。人
 馳集り。杖とろく。ま。せ。ら。る。馬。を。引。出。し。て。御飯館。こ。が。れ。は。嘉門。お。う。

あらうと感嘆し。それの。人。へ。轉信。が。り。あ。ひ。た。る。虚無の謀計。伏兵。を
 かく。て。其。理。と。ま。ら。ち。り。と。称。美。の。折。し。も。以。前。の。手。負。熊。い。ろ。ろ。ひ
 て。は。処。へ。走。り。来。る。を。荒。武。者。も。あ。け。な。ら。ず。て。手。槍。を。こ。り。て。巴。小。つ。き。殺
 き。ん。と。は。ら。を。勝。基。又。あ。ひ。や。れ。ま。て。ま。げ。と。声。の。り。て。こ。め。あ。ひ。夫。六。韃
 を。考。る。小。文。王。太。公。望。を。得。る。時。止。て。非。熊。と。い。つ。と。我。今。已。ふ。当。世
 の。呂。尚。を。得。て。い。ろ。ろ。ぞ。熊。を。欲。せん。マ。无。益。の。殺。生。好。む。べ。ら。ず。と。い。つ。と
 放。や。れ。と。あ。つ。せ。け。れ。は。荒。武。者。ども。呀。こ。こ。た。つ。て。放。ち。け。り。勝。基。桂。之
 助。ふ。む。ひ。和。殿。ハ。今。ま。げ。一。世。と。ま。の。ひ。飯。国。の。時。節。を。ま。ら。ぬ。は。は。老。母
 ハ。ま。ら。ぬ。は。家。小。あ。れ。の。さ。ひ。て。む。ひ。の。乗。物。を。ぬ。て。よ。び。ら。ば。嘉。門
 ハ。今。ま。げ。ふ。も。ち。る。ひ。や。ん。幸。雪。も。ふ。り。や。ら。ぬ。こ。の。こ。の。ひ。て。馬。ひ。き。を
 て。乗。あ。へ。吉。嘉。門。ハ。馬。の。左。り。小。ま。ら。ず。大。勢。力。の。荒。武。者。ども。列。を。た。ぐ

あつてもあつても雨露もさけたる骨のほぐれた男も女とも口あかぬ
 たる影もひとさへ薄又えそ浪と踏ここの由をまらへく年ふりし
 亡者や頬鬚生えけりといとあはれしき男のひき肉脱もせむなや
 しく又あへそのあけの亡者あへん白髪を乱せる蝶の亡者庭火の
 かげふろくびゆるおまを子の顔をほじのぞれんとてさめくこなく孫み
 心の残りほろく白鼻ひく口由にてと醜男の亡者むひ火なく女は
 けいんとあつりそとらじげお立たる後の夫とむらへたる恨とあはれ
 かくまぬぐの亡者蜂のぞくふ群蟻のぞくふ集来れども家くの
 男女の目あへ少も又つがる様子有ぬ山三郎おのれも命あつりそ
 亡者の数お入るく一度はかどられ蜂の一期朝露の命泡沫
 无常老少不定の世のあらむ皆あつのごと二度は致さそたれそ

ける所ふ背後の方ふ山三郎くとよぶ声虫のなく音ふ異あつど山三
 郎をひるがくそをぬをぬれ正しく亡父三郎左衛門あつぬらち
 おどろけつ平伏しそ礼をほ世を去あ親人お又あお妻の不思議
 さつとつんば三郎左衛門のひけら汝我仇をむくりんと身を苦しめ
 るひを尽そを苔の下まで不便ふるひこれまであつらぬあつらぬぞ
 汝伴左衛門をぬとめんとあつた他をぬとむら無益ありそや京都
 お立起るんぢが幼年の時ひひやがけつる女をたぐぬて相まへりば
 おのづから伴左衛門おわづらあふぢがけまを告ん為おまををまわつ
 ぞ親子ハ一世のちぢりあぬが再まらぬを得がじといひとて
 さつんとよる袖おまらり。せめて今あつまちあつまじといふを
 夢さつて旅店の宿所お只独惘然として居らりけるが五更の鐘お

だり雲くも小箱こばこ妻つまの閃ひらたり形かたちをまきせたる小釘こてい線せん入いれたる袖そでごとくつけて
 つまつま小着こぎする。そのの較さあ函はこの大小おほきちひを関せきの木き小こおび目めせし笠かさの下した小懐こくわい
 紙かみの覆おほ面めんかけ。肩かたを首くびより高くはしりて六方ろくほうめぐる小手こてをおちり
 大おほ路ぢせ返かへと歩あゆみ来る侍さむらいあり。巴よこ小こ兩人ふたりおれちひけり時とき三本傘さんぼんがさの
 紋もん付けたるその侍さむらいのあまりてめちこの侍さむらいの刀やいばの鞘さや小鞘こさやとほしと打
 あてけるが雲くも小箱こばこ妻つまの侍さむらいとちこの璫こぶしをまるとあざり。臂うでをおちりて
 怒いかれる体ていあり。ちよその手て爪つめおひのけてちんととどむ。ちよそのまは
 臂うでを伸のびして引ひきむ。なびふ口くちおひ一言いちごんといふとどむ。つひ小刀こたがを抜ぬけ
 て丁ちやう志しと打うちひけぬ。群ぐん集あつの諸人しよじんちよとて。その誼げんご譁ごよとさ
 ら立たち。東あづま西にし散さん乱らんして。ひろに大おほ路ぢ小こ只ただ兩人ふたりちよけちちよしつ。斬きるむとどむ
 ひと。兩人ふたりの猛まう兒ご勢せいおとどして。誰たれひとりともちよをさむむ者ものちよちよけち

時ときふは曲まが中ちゆう第一だいいちの名な妓ぎとよむれ。その名な在あるかるとなる。神かみ林りん道だう順じゆんが
 のの。葛くわ城じやうとらふあそび女め離りのちちと。此こゝ体ていをえ。いそぎとく。裙くもふ
 るとて出来いり。いとあやうげあり。劍けんの下したをぐるると。兩人ふたりのちよとて
 ちよ。鴛うづ鴦やうの轉まわ出でたるがどと声こゑとひひけぬ。おん二ふた方たうもふはありげあり
 せん方かたとええとぶる。所ところどもささひむむ。又また傷いたふおびむ。おんおんじや
 たがひあやあ。い。宿しゆく恨ごんのあゆむと。さ。誼げんご譁ごの妻つまふ
 かりて。双方ふたうともおん刀やいばをおさめたびちん。と。笑わら教がうつらとてとめけり。
 兩人ふたりの葛くわ城じやうが理ことわりある詞ことばを耻はぢん。その音ねマあそびん。ひとくちちよなつと
 刀やいばを鞆たもとふちちちて。衣服いふくの塵ちりを打うち払はひ。雲くも小箱こばこ妻つまの侍さむらいの出口いしけの方かた
 へつちち。三さん本ぼん傘がさの侍さむらいも退ひつにたるを。葛くわ城じやう袖そでをちちと。と
 とめ。か。この編あ笠がさ茶ちや屋やふめて。ちち。あ。この女めふ。ちち。ちち。ちち。



つらき



京五條坂の
 曲中おまつて
 まあをびと
 鞘當誼譚
 の圖

各古屋

所がうこそ物馴たゆ女おねば。物語一巻といひて出たぬ。おとあて
 別子人もあけねば。昔城かの侍おむらひ卒尔ありといふども。さし度古又
 のらんがうり。妻の葛城と申をあそびあつた。おん身三本傘の紋つけあふふ。
 若名古屋山三郎どのあへあふとつひかの侍打問てさそひ同井おびる
 葛城どのあつた。おと山三郎お何の所縁ありそたがなるや。推量の
 ごとく某の山三郎ありとて編笠をそねば。葛城敷をつれくと打まのり
 幼時つれねたども。面あつたとえおねば。姓名のおほじおん方おれども。
 おん身ハ妻がたがねる人あふとて。疎忽のなんのおほじおれ妻ハ大和の
 国佐々木の家臣名古屋三郎左衛門どの子息山三郎どのとて。おん身
 時ひあづけの殿あつた。たがねるおんがうりとて。おいあけふへけとて。
 かの侍眉をまへり。あつた。おん身ハ和州守町の浪人。高間久来

右衛門どの息女あて。幼名を岩橋といふとて。おん身とつひが葛城おとあて
 ちておん身ハさばりて。妻が出身をよくあつた。おん身とつひが侍堂
 をとこと打誠お不思議の出会いあり。今ハ何をいふとて。おん身ハ
 ちのたが子あふ佐々木の家臣名古屋三郎左衛門正春どの。僕麻呂と
 ちと者あり。おねて山三郎どの幼年の時ひあづけの女子あり。この同
 ちん身あてありける。某の所おあつて。今世ハ此曲中へまじり。おん身
 ちん身あてあり。先年主君三郎左衛門殿佐々木の家の執權不破道
 ちん身ハおん身ハ。大が兒子伴左衛門が為小闇打おあひあひ。その夜おん館の騒動に
 ちん身ハ。山三郎どの浪の承とありあひ。敵伴左衛門がやくとて。おん身
 ちん身ハ。たれ所くかぐをわら。旅路小月日をたどりあひ。道ぞろ当国小幡れ
 ちん身ハ。里おあつて。おん身ハ。其もその所おはへ。おん身ハ。あつた。おん身ハ。日人の噂を同

山城の国
小幡の里
山三郎
貧家の
光景



麻虎



山三郎

のことこれ深編笠不教かこし。雲不稲妻の衣服着なり侍五人。一
 様不打扮て。頃日かの所く此曲中不往來を。そのうち一人のまこと
 伴左衛門かまへしといひ。麻菰をねを閉五人の者一人の伴左衛門を
 残る四人の深層三平笹野蟹籠。幸泥助大上雁八といふ者不疑
 かし。皆助太力し。三郎左衛門どのをちたる者ども之正是天のうへ
 ありとまび壁不耳あり垣不ゆひめありといひ。此所まで長物語の
 あし。かゝん。かきわけて又相まう人かえといひて。立よとが葛城袖不
 是今のひしこと。かゝるおのむとあり。は麻菰くまづ。又編笠不
 教かこして。出あけ。葛城の神林が家不あつとぬ

卷之五上冊終



